

## 中学生・高校生の悩みに対する教師の役割について

石橋 太加志<sup>1)</sup>

### はじめに

子どもたちに関わる問題は、さまざまな事件や事故という形で表出している。それは、学校において起こる日常的な事件・事故に加え、凄惨な大事件や大事故もマスメディアを通じて報道されることも多い。今や学校は特別な備えや対応すら求められているのである。瀧野(2006)は、事件・事故などによって学校の運営機能に支障をきたすような事態は、学校危機 (school crisis) と呼ばれるようになったと紹介している。

また、子どもたちを取り巻く厳しい状況は事件や事故ばかりではない。目覚ましい技術革新に従い、身の回りにあふれる膨大な情報から必要なものをいち早く選択したり、削除する高い能力を求められることによって、中学生・高校生のなかには負担に感じている生徒もいることだろう。

学力低下問題を受け、先ごろゆとり教育から学力重視へとシフトしたように、文部科学省の施策が転換することで、子どもたちの通学する学校の目標が劇的に変化することもあった。

戦後日本は、高度経済成長を経て世界の経済をリードする存在になりえたが、こうした経済の発展は、女性の社会進出、男女雇用均等法の制定なども相まって、家庭では両親が共に働いている状況が多くなった。このことで、子どもたちが親と接する時間も短くなってきている。2008年のアメリカの「リーマンショック」は世界中の経済に打撃を与え、日本も働き手に対して大きく影響を被ってしまった。「リストラ」や「派遣切り」などそれは、子どもたちにとって家庭のなかでも敏感に感じ取れるだけの変化であった。家族がそうした苦境に立たされている子どもたちと直接接している教育現場の教師は、子どもたち自身では解決し得ない家族の悩みを抱えているということを実感している。学費が払えず、高校生自らアルバイトをして体調を壊したり、アルバイトの結果慣れ

ない大金を手にして繁華街で遊ぶことを覚えてしまう高校生もいる。企業が経営の困難さから「内定取り消し」をおこなったことは、努力して、受験を突破し、大学を卒業しても就職できないかもしれないというイメージを持った高校生も少なくない。

### 研究の目的

こうした子どもたちを取り巻く変化の中で、子どもたちが変わってきている、あるいは、おかしいとさえいわれ始めた。次々と表面化する問題行動に、前述したように核家族化、少子化、シングル家族といった家族の問題や、環境の問題である遊び場所の減少や、従来は子どもたちを支える土壌のあった地域でさえも、さまざまな活動(お祭り、町内会の催しなど)が減少し、子どもが人と接する機会も少なくなってきた。近年他者との関係づくりや、関係がこじれた場合の回復の仕方に困難さが増していることが教育の場で語られることが多くなった。こうした問題が、必ずしも経済の繁栄との関連を証明したものはないが、日本と外国との国際比較から、中学生や高校生といった若者の考え方の未成熟ぶりを、松井(2000)は、日本の若者は人間関係に顕著な問題を抱えていると報告している。

各家庭の子育てに関する考え方の違いはあったが、さまざまな要因で悩みを抱える子どもたちの支え手が現実には減ったために、学校や直接子どもとかわる存在である教師に対して、今まで以上に子どもの支え手として期待されるようになってきた。川原・山崎(1996)は、一つの学校や一つの学級のなかに多様性のある子どもたちが存在すること、それは教師にとっては学級経営や生徒指導の際に多大な苦勞をもたらす一因になると想像できるとしている。こうした困難さはあるものの、この期待感が、子どもたちの問題行動の原因である悩みの軽減に学校の教師が果たすべき役割の度合いを高めているといえる。

したがって、本研究の目的は、中学生や高校生の抱える悩みを先行研究から様々な角度で見直し、今後学校の教師はどのような役割を求められるのかを検討すること

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科  
心理学専攻心理危機マネジメントコース

にある。

阿部・田嶋(2004)は、「悩み」という概念については、心配や不安に加えて、ストレスなどと関連した用語と概念的に重なる所が多いと考えられるが、その区別や関係が明確には論じられないまま研究がおこなわれていることを課題としている。そこではじめに子どもの実態と問題行動をまとめた後、現在までに行われている研究を以下3 中学生・高校生の悩み、4 学校における中学生・高校生の悩みを支えるシステム、5 中学生・高校生の悩みに向き合う学校の教師、6 問題点と課題、のように整理してみる。

### 子どもたちの実態と問題行動

問題行動という語は、教育現場・臨床現場等領域多義にわたり使用されている。その定義には広義のものと狭義のものがあり、文部省(1979)による生徒指導資料での問題行動の記述に、「法律や社会慣習などの社会規範から逸脱した行動(社会的な逸脱行為)」という、非行とほぼ同義のものと、「保護者や教師や仲間が迷惑を被っている行動、法に触れ警察機関などが統制の対象とする行動、本人が悩み、困惑している行動」とする広義のものがある。問題行動を表面的に理解することなく、きちんとその内実を理解することは難しい。児童生徒等の問題行動を理解して対応するには、「水面に浮かぶ氷の原理」(中山2001a)にあるように、表面に現われている問題行動は、水面上に出ていて目で見ることができ氷の部分に相当し、問題行動を生み出している背景(家族関係、生育歴、友人関係など)は、目で見ることができない水面下の氷の部分に相当するとしている。

問題行動とは、以前より非行の領域である喫煙、飲酒、万引き(窃盗)、けんか、暴力事件等に加え、近年はいじめ問題、学級崩壊、不登校等の問題や性に関わる問題、授業や部活動でのけが、自然災害(地震など)をも含む。文部科学省(2007)によると、不登校生徒の数は、平成17年度の中学校の不登校者数が99,578名であり、全生徒数の約3%にあたることを示している。小林(1996)も報告しているように、高校中退問題も不登校に合わせて同時に起こってきている大きな問題である。このことで増田(2001)は、フリースクールの増加・ホームスクーリングの認知化への動きなど不登校対策が学校制度そのものの在り方を問うところまでできていると述べている。また、非行問題においても青少年白書(内閣府、2007)によると事件で検挙・補導された少年の人員・件数とともに平成14年度から上昇している。

中学生・高校生の非行の種類に関しては、多様化してきている。かつては欠損・貧困家庭出身の少年が多かつ

たが、中流家庭にとどまらず家庭の層で識別することは困難になってきている。また、高橋(1985)は、以前から非行原因の主要因として家庭背景(家族間の葛藤等)が挙げられていて、学校での適応状態も重視されてきていると指摘している。高橋(1985)はさらに中学生と高校生の調査から、非行を行う生徒が学業・教師との関係・友人関係などにおいてどのような特徴をもっているかを示した。非行を行う生徒は、慣習的な活動(勉強・クラブ活動等)を熱心に行わず暇をもてあまし、学校生活で大きなウエイトを占める授業や部活動等において不適応現象を示し、ストレスを生じさせていることを述べている。

こうした問題行動を起因するものが子どもたちの何らかの悩みであることは教育現場ではよく知られてきた。問題行動の原因となっているものをストレスから説明しようとする試みは多くされている。安藤(1985)は、学校生活の場面でどのような出来事や状況がストレスになりうるかということをも3つに分けて示している。すなわち、①心理的事象(A生活環境の急変B生活時間配分の不均衡C興味や資質と学校の課業内容とのずれD要求水準と成績との格差Eその他)②社会的事象(F役割期待と自己の性格や力値とのずれG矛盾する役割期待H役割期待と自分の信念や価値観とのずれI孤独と孤立Jいじめや暴力の標的Kその他)③物理的条件(L学校立地に問題がある場合M学校の空間配置に問題がある場合N教室内部の空間に問題がある場合Oその他)である。大前(1999)、岡田(2002)は、中学生の心理的ストレス論からこうした問題行動について検討をした。

高木・山本・速水(2006)は、問題行動を教育的な立場から特に指導が必要であると判断される行為や行動と広義に定義し、高校の生徒指導における指導回数を問題行動の指標とし、それに対して自尊感情および仮想的有能感と対人関係が及ぼす影響を検討している。

太田(2000)は、子どもたちの取り巻く環境から中学生や高校生成が放課後に集う場所、気楽に友達同志で集まる地域の拠点がないこと、地域での居場所がないこと警告している。また、小学生の児童も、児童健全育成事業という名称で、子どもの遊び場所や放課後の過ごし方についての対策があるが、児童館や児童公園などのハード面での充実に終始していて、十分な人間関係を育むことになっていないことを報告している。鈴木(2003)は、スクールカウンセラーの働きとして、学校での「居場所」作りについて研究している。学校では対人関係を改善するために道徳の時間などを使って対策を講じることがある。近年学校現場で、心理教育の必要性は高まってきている。

## 中学生・高校生の悩みについての研究

阿部・田嶋 (2004) は、青年期における「悩み」を「本人に意識化されている欲求不満や葛藤の体験であり、認知・行動・生理面に影響を及ぼす、容易に解決できない持続性のある問題」と定義した。さらに、「悩み方」の状態像として、①回避②観察③抑うつ・戸惑い④葛藤・模索⑤巻き込まれ抽出した。

中学生・高校生の抱える悩みは、友人関係、教師との関係を含め、経済的な問題、保護者との関係、外部との様々なトラブル、など多岐にわたる。とりわけ、携帯電話からつながる外部との接点は、発見が遅れることが多く、重大な問題につながることもある。いわゆる出会い系サイトを通じての援助交際は以前から危惧されたが、迷惑防止条例のため、一時期改善されたといわれていた。しかしながら、最近では出会い系サイトに代わって通常の無料ゲームサイトを通じて出会ったり、off会で出会ったり、自らプロフを作りそこへアクセスしてきた見知らぬ大人と会っているのが現状である。そこで起こる事件は、中・高校生が不用意にプロフで個人情報をさらし、通学する学校を特定され、張り込みをされ、後をつけられるなどのストーカーの被害等がある。中には痛ましい事件に発展したものもある。

ところが中学生に関する「悩み」の実態については必ずしも積極的に調査研究がおこなわれてきたわけではなく小針 (2008) は指摘している。さらに、子どもたちの「悩み」の実態やその相談先を含めて、十分に実態解明がなされていないとしている。小針 (2008) は、中学生にとっての悩みを①将来の進路②現在の学校での成績③友達との関係④先生との関係⑤親子関係の5項目について調べている。その調査は、小針が直接分類したもので、子どもたちのニーズ調査から発展した分類ではない。このことは、今後子どもの悩みをニーズ調査して、丹念にその関係を見る必要があることを示唆している。佐藤他 (1991) は、高校生の抱える悩みの内容とその解決方法について調査している。その結果として、悩みの内容としては、学習や進学に関する悩みが上位にあり、解決方法としては、自分ではどうしようもないと思って諦めてしまうものが多いということを示している。また、堀江・杉山 (2007) は、高校生の悩み解決過程について研究し、助言内容が肯定的であると、高校生は助言を容易に受け入れ、助言内容が否定的 (高校生の考えを支持しない発言) であると、その助言を受け入れられず、拠り所を失った空虚感から自分の考えを否定してしまう傾向を報告している。

子どもたちは中学生になると、教師との関係を小学校

のときのように綿密な関係を望んでいる。しかし、中学校に進学すると、その思いが裏切られたように感じ、担任が悪いと訴え、自己を説得する子どもたちもいる。おそらく子どもたちにとって、自分が今まで作り上げてきた「担任」というイメージが壊れ、児童期から青年期前期に移行するのも手伝って初めて、教師との関係づくりに躓くところではないだろうか。

友人関係と問題行動との関係において大谷 (2007) は、希薄な友人関係→ストレス→問題行動という認識に基づいた従来の指導・支援が孕む危険と、指導・支援の再検討に際して状況に応じた切替に注目することの有益性を実証的に示した。

友達とのかかわりにおいて、久芳・齊藤・小林 (2005) は、自己肯定感が高群の方がより友達への「積極的にかかわり」を行っていることを示した。さらに、中学生の教師とのかかわりにおいて、自己肯定感が高群である方が、教師に対してより親近感を持つことを示した。

江村 (2007) は、中学生にとって友人関係が学校適応において非常に重要な要因であるとし、良好な友人関係を築くために必要な要素としてソーシャルスキル (social skills) を挙げ、ソーシャルスキル教育が仲間受容に及ぼす効果について報告した。ソーシャルスキルの重要性は、小学生においては戸ヶ崎 (2006)、中学生においては渡辺・山本 (2002)、高校生においては小林ら (2003)、原田ら (2007) が報告している。

教師との関係を改善できないために教師という人的資源を活用できない子どももいる。狩野 (1985) は、教師との生徒との関係を学級集団の条件の観点から、集団力学では、教育の現場で生徒が教師のいうことに従う (教師が影響力を持ちうる) か否かということの背景として生徒が教師をどのように受け取っているかが大きく影響しているとしている。また、中学生への調査から生徒たちが、「先生は自分をよく理解してくれる」「自分の話を聞いてくれる」ということ、つまり教師—生徒間の親和的人間関係 (レポート) であることを示した。また、中武・佐藤 (2005) は、高校生を対象として教師への心理的距離と学校適応との関係を検討している。教師への心理的距離が小さい生徒の方が、心理的距離が大きい生徒よりも「教師関係」「進路意識」「規則への態度」「学習意欲」「学校適応全体」において高くなる傾向を見出している。

学校生活に順応と享受の違いから、岡田 (2008b) は、順応することが中学生に不安を感じやすい領域である友人関係に影響していること、学校生活を享受することが中学生が反感を抱きやすい教師に影響していることを示唆した。

友人関係では、コミュニケーションの力が落ちている

といわれている。このため小トラブルでさえ子どもたち同士解決できず、大人の力（教師）を借りたり、面倒くさいとして（それだけ友達との関係も薄いため関係修復に動かない）ほおっておく子どもが多い。現場の教師はこうしたトラブルに積極的に関わろうとするが、生徒は教師にすべてを話すわけではなく、教師は生徒との交流のなかで生徒同士の関係をすべて把握できるわけではない（川原・山崎1996）。教師がおこなう聞き取りや見たことすべてが事実のすべてではないことを示唆している。

### 学校における中学生・高校生の悩みを支えるシステム

伊藤（1997）は、学校の中の校務分掌としての教育相談係についての意識と研修について報告している。また、石隈（1999）は、学校心理学（学校教育において一人一人の児童生徒が学習面、心理・社会面、進路面における課題への取り組みの過程で出会う問題状況の解決を援助し、成長することを促進する心理教育的援助サービスの理論と実践を支える学問体系）が教育現場で注目されていること、教師を学校教育におけるサービスの提供者と位置づけている。このことから、学校内で子どもたちの悩みを受け止める場所・人材が必要になる。学校社会における教師は、教職に就いたばかり新任教師から少しづつ一人前となり、やがてベテラン教師となる。そこで後輩の若手教師のお手本として、さまざまな教職に関わる話をしたり、実践している姿を見せたりしてきた。このことは、坂本（2007）も教師は一人で成長するのではなく、先輩教師をはじめとする同僚教師から互いに学び合い成長するとしている。松村・三上（2005）は、学校社会においても、先輩教師から後輩教師へそれまでのやり方の伝達がうまくいかないことが続いてきたと述べている。

校内相談室は、中学生や高校生にとっていちばん身近な専門家との相談場所となっている。小倉ら（2007）は、中学生のほうが高校生よりも、校内相談室を居場所として認識しているとし、使用頻度の低さから中学生が居場所として校内相談室を利用したいというニーズがありながらも利用できていない可能性を報告している。また、野村ら（2008）は、相談相手がおらず不適応感を募らせている生徒にとって、校内相談室が重要な援助資源であること、友人や母親は相談対象として選択されやすいものの、母親や友人に相談することそのものよりも、相談対象がいるかどうかに来室意欲や適応に影響を与えていることを報告している。伊藤（1999）はスクールカウンセラー（SC）自身のSC制度に対する評価について研究

し、教師との連携に関する役割遂行のSC群の評価は肯定的であること、学校要因（教師の意欲や学校の受け入れ等）を評価するSCは、自分自身のSC活動に対する満足度が高いことを報告している。校内相談室の運営については、川島ら（2008）が、効果的な校内相談室の運営、援助機能の促進を実現するためには、継続的にどのような悩みを今生徒が抱えているのか、またその背景要素をニーズ調査などを活用しながら、学校環境をアセスメントし、日々の実践につなげていくことが重要としている。20年以上前に小泉（1983）は高校の教師の例を報告している。「高校では、ある水準以上の学力と正常なパーソナリティーを持つ生徒を受け入れ集団として教科指導を中心に教育していくところであるという高校教育観を持ち、脱落する生徒は学校へ来る資格がないという切り捨て主義の指導感が強かった」というものである。

しかし現在では、教師は、教師とスクールカウンセラーは学校内で敵対視する存在ではなく、ともにその専門性を認め合い、悩みを抱える子どもたちのために協力し合うことを知っている。石隈（1999）は、教師のスクールカウンセラーに対するニーズ調査の結果から、とくに「学習意欲のない生徒」「不登校生徒」「友達関係のうまくいかない生徒」の指導・援助に困難を感じている教師が多く、スクールカウンセラーに対するニーズも高いことが知られている。

校内での子どもたちへの関わりや教育相談についての教師側の姿勢について、坂田・廣井（2007）は、スクールカウンセリングは通常のカウンセリングセンター等で行う面接とは異なり、クライアントや学校自体にかなり積極的に関わっていくことが求められるとしている。

学校教育相談の進め方として、生田（2000）は、スクールカウンセラー等の実践からの報告として、ピア・サポート（子どもたちが何か悩みを抱えたり、困った時、自分の友達に相談することが最も多いという事実に基づいて考えだされた方法）が重要であるとしている。

永井・新井（2007）は、利益とコストの予想が中学生における友人への相談行動に与える影響について検討している。そこで、相談行動の高さには、相談実行の利益、問題の程度の高さが影響し、相談実行のコストは相談行動と関連していないことを明らかにしている。

岩瀧（2008）は、友人などのボランティア的ヘルパーや保護者などの役割的ヘルパーは学習・心理・健康・社会・進路のどの領域の悩みににおいても相談相手としてとらえているとしている。さらに中学生は教師に対し、学習指導・進路指導という専門的なサポートを期待し相談するが、心理・健康・社会の問題では、学級担任教諭や養護教諭が部分的にしか相談相手としてとらえられてい

ないことを示している。

学校外に目を転じて、教育相談について外部の諸機関との連携の問題がある。学校側と教育相談関係機関との間での連携の必要性は現場でも実感を持って認識されてきており、中山（2001b）、石橋（1999）もその必要性に言及している。各機関との連携のあり方について述べ、教師はその業務内容などについて十分に把握しておくことが大切としている。

子どもたちの悩みを受け止める相談機関として、学校外の来所できる連携機関として具体的には、市区町村の教育相談室や大学の心理相談室、病院の心理カウンセラー、警察の心理相談等ある。こうした相談機関の役割について橋本ら（2007）は相談内容について調査している。それは、従来の教育相談の内容であった「不登校」「いじめ」「暴力」「自殺」「体罰」であったが、そこに通常学級に在籍する発達障害児を中心とする「特別支援教育の対象児への対応」「虐待」「青年期の問題（高等学校中退、ひきこもり）」などが加わってきていることである。

### 中学生・高校生の悩みに向き合う学校の教師

教師が知っておくべき中学生が抱く「相談することに対する抵抗感」について、後藤・廣岡（2005）は、半構造化面接調査の結果、相談時に抱く抵抗感などを中心に、中学生に特徴的な心の働きがあること、生徒とかわる時間の長い教師が生徒と対応する時に、カウンセリングマインドの生かした方法での対応が必要であることを報告している。

日常、生徒は友人との間でさまざまな活動を共有し、相互に影響を及ぼし合っている。特に学習面では、友人から多大な影響を受けることが教育現場では知られている。岡田（2008a）は、学習と友人関係という2つの側面を併せもった行動に対しては、両側面での自律的な動機づけに目を向けることが必要で、友人との相互作用のなかで、学習や友人関係に対する充実感を高め得ることを示した。

川原・山崎（1996）によれば、学級内の生徒同士の友人関係の実態と教師の生徒認知は必ずしも一致するとは限らず、この不一致がのちにトラブルが生じたときに教師に「気づかなかった」と感じさせる一因ともなり得ると警告している。このことは、長谷川（1997）も、教師の生徒認知のあり方が、生徒の側の認知と相互作用的な効果を発揮しながら生徒の心理状態に深くかかわってくると考える以上、教師による生徒の健康性や問題性の認知様式を明らかにしていく必要性は高く、生徒の内側だけに問題一般は存在しないのであり、それを問題として取り上げる教師の側の姿勢を問わなければならないとし

ている。

伊藤（2000）は、スクールカウンセラー（SC）に対する養護教諭の意識と評価を研究し、①養護教諭はSCの受け入れに積極的ではなく、連携スタイルは協力体制の望んでいる②相談活動に困難を抱えている養護教諭ほどSC事業にネガティブな評価をする③養護教諭がSCと連携が取れているほどSCへの評価が高い④SCに満足している養護教諭ほど子どもとの関わりに変化が見られた、と報告した。川原・山崎（1996）は、教師の積極的な働きかけやスクールカウンセラーの配置など「大人世代が子どもに直接的に介入すること」は重要な視点であるとしながらも「子ども同士の仲よし関係」自体、つまり「友人関係」にもっと注目する必要があるとしている。

### 問題点と課題

近年、子どもの抱える悩みは多岐にわたり、その教師とスクールカウンセラーの協力関係の重要度は増すとともに、教師の判断力の重要性が高まっている。まず子どもたちの悩みを聞くのが非常勤のカウンセラーよりも日頃直接かわる分教師のほうがやや身近なことが多いからだ。したがって、教師が担う悩みへの対応のレベルアップと、どのように人的資源につなげるかのマネジメント力が重要となってきている。

子どもたちが悩みを抱えているときに、教師がどのようなことができるかということについて、教師自身が来所して相談できる期間は少ないことが問題となっている。日々の仕事で時間も無く、外部との接点の持たない教員は、職場内で相談できる同僚や先輩教師に恵まれないと、悩みを抱えたまま、ストレス等で病気休職や、退職に追い込まれる問題も起こっている。教師自身が外的資源を勝ち取ることは依然難しい状況である。松村・小林（1998）は、教師のための電話相談についてまとめ、教師が悩みを抱え込まない方法を提示している。

都丸・庄司（2005）は、中学校教師の調査から対生徒関係についての悩みの内容と構造を明らかにし、それが「生徒への抵抗感」「生徒指導上の困難感」「生徒からの非受容感」「関わり不全感」であることを示した。また、教師は悩みに対処し、自分自身の内面や周囲に支えられながら悩みへ取り組み、悩んでいく過程が教師に変容をもたらす可能性が高いことを示唆した。

教師が、学校の中で中学生・高校生の悩みそのものに向き合い、きちんと受け止めることこそ、悩みを解決、もしくは軽減につながると考えている。そこで、小針（2008）が明らかにした悩みのうち学校生活におけるもの「将来の進路」「学校での成績」「友人関係」「先生との関係」を、中武・佐藤（2005）が示したように、教師

が「教師関係」「進路意識」「学習意欲」に影響していることから、教師がどのように影響しているのか悩みの構造を明らかにしていくことが今後の課題となる。

## 引用文献

- 阿部悦子・田窩誠一 (2004). 青年期における「悩み方」の過程に関する研究—体験的距離と心的構えの視点から— 九州大学心理学研究, 5, 229-237.
- 安藤延男 (1985). 学校生活のストレス 安藤延男 (編) 学校社会のストレス 垣内出版 pp.11-24.
- 江村理奈 (2007). 中学生に対するソーシャルスキル教育が仲間受容に及ぼす効果 宮崎女子短期大学紀要, 34, 25-30.
- 後藤安代・廣岡秀一 (2005). 中学生が抱く「相談することに対する抵抗感」についての実態調査的研究—三重大学教育実践総合センター紀要, 25, 77-84.
- 原田恵理子・谷村圭介・山田汐莉・渡辺弥生・安川民恵 (2007). 高校生における小集団でのソーシャルスキルトレーニングの効果 日本教育心理学会第49回総会発表論文集.
- 長谷川博一 (1997). 教師の認知した高校生の行動の不健康性 東海女子大学紀要, 17, 169-179.
- 橋本創一・小林正幸・畑中愛・安永啓司・賀澤恵二・須藤太郎・森崎正和・山中ともえ (2007). 学校教育相談・支援の総合対応化と現代的課題について—学校教育相談と特別支援教育に関する調査報告— 東京学芸大学紀要 (総合教育科学系), 58, 397-404.
- 久芳久美子・齊藤真沙美・小林正幸 (2005). 中学生の自己肯定感と人とのかわりとの関連について 東京女子体育大学紀要, 40, 19-28.
- 堀江幸治・杉山沙織 (2007). 高校生の悩み解決過程に関する研究—相談相手との関係性及び助言内容が決断に及ぼす影響について— 九州女子大学紀要, 44, 61-77.
- 生田純子 (2000). 学校教育相談の進め方—スクールカウンセラーや教育相談コンサルタントを経験して— 東海女子大学紀要, 20, 89-101.
- 石橋太加志 (1999). 学校教育相談室を有効に機能させるためには何が必要か 東京学芸大学大学院教育学研究科修士論文 (未刊).
- 石隈利紀 (1999). 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス— 誠信書房.
- 伊藤美奈子 (1997). 小・中学校における教育相談係の意識と研修に関する一考察 教育心理学研究, 45, 295-302.
- 伊藤美奈子 (1999). スクールカウンセラーによる学校臨床実践評価ならびに学校要因との関連 教育心理学研究, 47, 521-529.
- 伊藤美奈子 (2000). スクールカウンセラーに対する派遣校養護教諭の意識と評価 カウンセリング研究, 33, 30-39.
- 岩瀧大樹 (2008). 中学生が抱える悩みおよび悩みに対する相談相手・相談抑制理由に関する研究—1 昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要, 17, 53-68.
- 狩野素朗 (1985). 教育効果をもたらす学校・学級集団の条件 安藤延男 (編) 学校社会のストレス 垣内出版 pp.243-257.
- 川原誠司・山崎美香子 (1966). 中学生における友人関係の特徴と意義 東京大学大学院教育学研究科紀要, 36, 301-324.
- 川島一晃・小倉正義・平石賢二・江口佳織・野村祥恵・下村しおり (2008). 中学生・高校生の悩みに関する縦断調査—中学生・高校生の悩みと相談に対するニーズ (5)— 日本教育心理学会第50回総会発表論文集.
- 小針誠 (2008). 中学生はスクールカウンセリングを利用しているのか?—心理主義化する現代日本社会における中学生の悩みとその相談先— 同志社女子大学総合文化研究所紀要, 25, 26-40.
- 小林真・稲垣応顕・丹保弘則・土合智子・山岡和夫・多賀香世子・菅原千香子・川上純子・池上道子・島美恵子 (2003). 高校生に対するソーシャルスキル・トレーニングの効果 富山大学教育実践総合センター紀要, 4, 15-23.
- 小林剛 (1996). 高校中退問題を追跡する (子ども支援の臨床教育学—いじめ・不登校・中退問題への追跡—) 萌文社 pp.78-129.
- 小泉英二 (1983). 学校教育相談についての高校教師の意識に関する一考察 武蔵野短期大学研究紀要, 1, 2-13.
- 増田健太郎 (2001). 教職員文化と学校教育相談機能との関連に関する考察—ソトとの連携に焦点を当てて— 九州大学大学院教育学コース院生論文集, 1, 67-84.
- 松井洋 (2000). 日本の若者のどこがへんなのか—中学生・高校生の国際比較から— 川村学園女子大学研究紀要, 11, 101-114.
- 松村茂治・小林正幸 (1998). 教師のための電話相談—悩み・疑問へのアドバイス— 教育出版.
- 松村茂治・三上泰弘 (2005). 学級フィールドワーク (V)—先輩教師は新任教師に何を伝えたか?— 東京学

- 芸大学教育実践研究支援センター紀要, 1, 21-32.  
 文部科学省 (2007). 平成17年度における児童生徒の問題行動等の状況.
- 文部省 (1979). 生徒の問題行動に関する基礎資料—中学校・高等学校編— 生徒指導資料第14集.
- 永井智・新井邦二郎 (2007). 利益とコストの予期が中学生における友人への相談行動に与える影響の検討 教育心理学研究, 55, 197-207.
- 内閣府 (2007). 青少年の非行等問題行動 平成19年度青少年白書 内閣府 (編), 1-12.
- 中武章子・佐藤静一 (2005). 高校生における教師への心理的距離と学校適応に関する研究 久留米大学心理学研究, 4, 53-60.
- 中山巖 (2007a). 学校における教育相談の意義と役割 中山巖 (編) 学校教育相談心理学 北大路書房 pp. 1-15.
- 中山巖 (2001b). 教育相談関係機関とその利用 中山巖 (編) 学校教育相談心理学 北大路書房 pp.240-255.
- 野村祥恵・下村しおり・小倉正義・江口佳織・川島一晃・平石賢二 (2008). 中学生・高校生の悩みと相談に対するニーズ (6) —悩みの相談対象と適応からみる相談室の役割— 日本教育心理学会第50回総会発表論文集.
- 小倉正義・堀田愛・平石賢二 (2007). 中学生・高校生の悩みと相談に対するニーズ (5) —校内相談室の居場所としての機能に注目して— 日本教育心理学会第49回総会発表論文集.
- 大前泰彦 (1998). 中学生の学校適応感に関する研究 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 8, 33-40.
- 大前泰彦 (1999). 中学生のストレスとコーピング及びストレス反応との関係—実践研究の観点から— 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 9, 1-8.
- 大谷宗啓 (2007). 高校生・大学生の友人関係における状況に応じた切替—心理的ストレス反応との関連にも注目して— 教育心理学研究, 55, 480-490.
- 岡田佳子 (2002). 中学生の心理的ストレス・プロセスに関する研究—二次的反応の生起についての検討— 教育心理学研究, 50, 193-203.
- 岡田涼 (2008a). 友人との学習活動における自律的な動機づけの役割に関する研究 教育心理学研究, 56, 14-22.
- 岡田有司 (2008b). 学校生活の下位領域に対する意識と中学校への心理的適応—順応することと享受することの違い— パーソナリティ研究, 16, 388-395.
- 太田由加里 (2000). 中学生・高校生を取り巻く環境と居場所づくり—グループワークを活用の軸として— 人間福祉研究, 3, 113-125.
- 坂本篤史 (2007). 現職教師は授業経験から如何に学ぶか 教育心理学研究, 55, 584-596.
- 坂田真穂・廣井亮一 (2007). スクールカウンセリングにおける不登校への取り組み—援助過程における「父親」「母親」役割の試み— 京都女子大学発達教育学紀要, 3, 23-32.
- 佐藤有耕・山本誠一・加藤隆勝 (1991). 高校生の悩みと求める援助の特質 筑波大学心理学研究, 13, 141-154.
- 鈴木明美 (2003). 非行少年グループへのスクールカウンセラーの介入—学校での「居場所」作りを中心に— カウンセリング研究, 36, 464-472.
- 高木邦子・山本将士・速水敏彦 (2006). 高校生の問題行動の規定因の検討—有能感, 教師・親・友人関係との関連に着目して— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 53, 107-120.
- 高橋良彰 (1985). 非行・校内暴力を考える 安藤延男 (編) 学校社会のストレス 垣内出版 pp.120-136.
- 瀧野揚三 (2006). 学校危機への対応—予防と介入— 教育心理学年報, 45, 162-175.
- 戸ヶ崎泰子 (2006). 社会的スキルと適応 (谷口弘一・福岡欣治編 対人関係と適応の心理学—ストレス対処の理論と実践—) 北大路書房 pp.83-95.
- 田村修一・石隈利紀 (2001). 指導・援助サービス上の悩みにおける中学校教師の非援助志向性に関する研究—バーンアウトとの関連に焦点をあてて— 教育心理学研究, 49, 438-448.
- 都丸けい子・庄司一子 (2005). 生徒との人間関係における中学校教師の悩みと変容に関する研究 教育心理学研究, 53, 467-478.
- 渡辺弥生・山本弘一 (2002). 中学生におけるソーシャル・スキル・トレーニング (SST) の予防的効果 日本教育心理学会第44回総会発表論文集.  
 (2009年11月15日受稿)

ABSTRACT

Examination of the Role of the Teacher Who Sees from the Precedence Research  
on a Trouble of a Junior High School Student and a High School Student

Takashi ISHIBASHI

I aimed at throwing a teacher's future role and subject into relief through the precedence research on a trouble of a junior high school student and a high school student in this research. Although the trouble of a junior high school student and a high school student studied by the present is considered that there are many places which overlap with worries or the term relevant to stress etc. uneasy notionally, I made to perform research, while the distinction or relation have not been clearly discussed by it into the problem, and arranged and discussed the present condition of 2 junior high school students and a high school student, difficult behavior, and three troubles, without the teacher, six problems, and subject of the system supporting four troubles, and the school which faces a trouble of 5 junior high school students and a high school student. Facing a junior high school student and a high school student obtained doing what kind of thing and the concrete subject what kind of analysis was required.

Key words: a trouble of a junior high school student and a high school student, a teacher, school counseling, difficult behavior